

前回の「車で巡る 源氏物語、京の旅(2)」(つれづれ38号掲載)では、洛中・市内の小野篁邸まで確認した。今回は残りを見ていこう。

前回と同様に傍線を付した語は、源氏物語に關連する建物、施設、社寺、仏閣などを示す。

阪急西院駅近くに、淳和院跡がある。その東に、六町の西宮があり、これは源高明の居宅であつたのだ。その東八町が朱雀院で、平安京内最大の邸宅であつた。源氏物語では、朱雀帝の讓位後の御所に比定される(若紫、紅葉賀、少女、初音、真木柱)。

千本三条南南西のこの朱雀院から、四条西洞院南東の四条宮(当代随一の才人、藤原公任が伝領した居宅)、その南の紅梅殿(菅原道真の邸宅、「こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」(大鏡)の歌が思い出される)、また南の白梅殿(道真の生誕地と伝承)と続き、その東南東に、説話でおなじみの因幡堂、今の因幡葉師の地がある。その南が夕顔の宿である(夕顔)。東近くに現在「夕顔之墳」や「朝顔の墓」もあり、四条東洞院南東には、東五条院(順子の御所)もあつた。河原町松原の南西に崇親院があり、ここは、某院(なにかある)になぞらえられる。光源氏が夕顔を連れ出した廃院である(夕顔)。言うまでもなく他説もある。その南、今の河原町五条南西付近が、四町の河原院であり、言うまでもない源融の邸宅であり、塩竈の浦を模した園池で有名であつた。

車で巡る

源氏物語、京の旅(3)

前 兵庫県立川西北陵高等学校

小田剛

「塩竈にいつか来にけむ朝なぎに釣する舟はここに寄らなむ」(伊勢物語、第八十一段)の歌がある。これが光源氏の六条院のモデルである(少女、宿木、匂宮、総角、蜻蛉)。同地はまた六条御息所邸でもあつた(夕顔、若紫、潯標、少女)。その西に時康親王(即位前の光孝天皇)の御所であつた釣殿院があり、中六条院(宇多上皇の御所)、南院(淳和天皇の御領・御殿)と並ぶ。南院の北西が池亭(方丈記に影響を及ぼした池亭記で有名な慶滋保胤の邸)であり、その北西に千種殿(具平親王の御所、長女隆姫は頼通を婿に迎えた)、五条天神と続く。牛若丸と弁慶がはじめて当社の境内で出会つたこと(義経記)や、醍醐天皇の御代に当社の近くの柿の木に仏が現れると言つて、庶民が群集した

こと(宇治拾遺物語)など逸話や伝説の多い五条天神の真南が、桂宮(孚子内親王の御所)である。またその真南に、二町の亭子院(宇多上皇の御所)があり、その西には、十二町の東市が広がつていた。さらに西には、朱雀大路(今の千本通)をはさんで、二町ずつの東西の鴻臚館が存在した(桐壺)。さらにその西に東市と同じく、西大路七条辺には十二町の西市があつた。その西市の南南東、JRの線路の南に西寺があり、今は碑が一基立つのみである。それに対して東寺は、弘法大師(空海)ゆかりの寺として、今に繁栄している。その東に玉鬘九条宿がある(玉鬘)。その東南東に九条殿(藤原師輔邸)があり、この流れが九条兼実、良経など九条家として歴史に登場してくる。以上で京内の旅を終えることとなる。

では再び京外・洛外へ出よう。旧五条(今の松原)通の、京都の北西のアタゴではなく、オタギとよむ東山の愛宕寺(珍皇寺の西)へまずつ行く。ここは、桐壺の更衣の葬送が行われた寺であり、後に、女三宮に密通した柏木の葬儀所ともなつた(柏木)。そのはるか東に逢坂関があり、百人一首の十「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」(蟬丸)と、歌にもよく出てくるが、源氏物語では、第十六卷「関屋」の舞台でもある。また西へ戻つて、先程の愛宕寺の真南が鳥戸野(トドノ)であり、豊国廟の真南に当たり、阿弥陀ヶ峰(鳥辺山)山麓一帯

である(葵)。現在泉涌寺近くに、枕草子に類出する一条天皇皇后定子の陵がある。そして少し南へ下ると、そこは法性寺であり、今の東福寺の地に相当し、国宝の東福寺の三門が偉容を誇っている(東屋)。さらに大和大路を南へ下ると、そこは極楽寺であり、「藤裏葉」に、内大臣(もとの頭中将)が母の忌日に参詣したとの記述がある。今の宝塔寺・瑞光寺とされている。そうして今のJR・近鉄・京阪電鉄沿線付近ではなく、大亀谷(狼谷の音の変化による)南の山中を通って、薫や匂宮といった貴公子は、宇治へ向かったようである。木幡には藤原氏ゆかりの淨妙寺もあり、この地は藤原氏の塋城(墓地)であったのだ。そこを南へ進むと、宇治十帖の世界である。

まずは宇治山寺へ行こう。八宮を訪ねる「聖ひじりだちたる阿闍梨」のいる宇治山の寺であり、今の三室戸寺が想定されている(橋姫)。その南の宇治八宮山荘は、平等院の対岸であり、宇治神社・宇治上神社のあたりと思われる。なお宇治上神社の拝殿と本殿は共に国宝であり、その拝殿は寝殿造風の住宅建築で、平安時代をしるばしる(榎本)。その対岸の、宇治川にかかる橋を渡った所が平等院であり、ここは源氏宇治別荘に比定されている。今日にする平等院は国宝の宝庫であり、平安貴族の源氏物語的世界を眼前に展開させてくれる(榎本)。また源三位頼政がここで戦死した平家物語的世界

でもある。扇の芝において、軍扇を敷いて辞世の歌を歌ったさまが想起される。さらに宇治には源氏物語ミュージアム——近くに与謝野晶子の歌碑もある——や宇治十帖の古蹟も存在する。宇治は嵐山同様、山から流れ出る川が平野にひらけた所であり、史跡が散在している。その宇治川が、桂川、木津川と合流して淀川となるあたりが、宇治のほぼ真西に存在する石清水八幡宮（対岸の天王山の女山に対する）の頂上に鎮座し、眺望がよく、地図を見ても分かるように、天王山同様、戦略上の要衝・拠点であり、太平記にも登場する。また新古今歌人の小侍従ゆかりの神社でもある。向かいの天王山は、淀川の西、西国や高槻あたりより、また男山は、淀川の南東部の枚方あたりより攻め上ってくる軍勢を、京よりむかえうつのに、絶好の地点と言えよう。源氏物語では、上落した玉鬘が石清水を参拝している(玉鬘)。

(おわり)

付記
なお参考として、源氏物語における年齢差を記しておくこととする。これによって、光源氏より年上の女性、例えば、最愛の藤壺と、添い臥しの姉さん女房の葵上とは一歳しか違わないとか、源氏と女三宮とは親子以上の年の差であり、いかにも不つりあいの夫婦の仲であるとか、さらに明石の姫君は源氏二十八歳のときの女であることなどが分かる。なお頭中将は、葵上の兄であるので、しかとは分からぬが、源氏より六、七歳年上であろう。

源氏より年上、七歳・六条御息所(はるか源氏より年上)、五歳・藤壺、四歳・葵上、三歳・朱雀院(異母兄)、二歳・夕顔(年上であったのだ)。源氏より年下、二歳・鬚黒北の方(これも夫より年上)、五歳・鬚黒、八歳・紫上、九歳・明石の君、秋好中宮(前斎宮・斎宮女御)、十四歳・玉鬘、十六歳・柏木、十七歳・弘徽殿女御(有名な女御とは異なる女性)、十八歳・冷泉帝、十九歳・雲居雁、二十一歳・夕霧(この二人も女性が年上)、二十四歳・真木柱、二十六歳・女三宮、東宮、二十八歳・明石姫君である。ちなみに宇治十帖の薫と源氏の年齢差は四十七歳、お爺さんの子と言わねばなるまい。薫に比べて、大君は二歳、匂宮は一歳年上、中君は同年、浮舟は五歳年下である。